

外国語としての日本語の敬意表現学習における問題点 —大学留学生別科日本語教育課程の事例から—

戸田 和子* 小柳津 智子**

Japanese Honorific Expressions --Analysis and Suggestions for Teaching--

TODA, Kazuko OYAIZU, Tomoko

Abstract:

Japanese honorific expressions are one of the most difficult areas for foreign students. In most classrooms only honorific vocabulary and some dialogs are learned. Depending on their native languages, foreign students show certain tendencies when they make mistakes. In this paper our observations of their typical deficiencies and suggestions to help them are presented.

KEY WORDS : Japanese honorific expressions, politeness, context, insider/outsider

要旨:

留学生にとって日本語の敬語は学習する上で困難なものの一つである。現状では、様々な場面の敬語表現を学習させているが、語彙レベルでの指導には問題点も多い。学習者の母語を考慮し、社会で機能する適切な日本語の敬意表現を指導するときの問題点とその方法について考察した。

キーワード: 敬意表現・敬語・丁寧さ・文脈化・「ウチ・ソト」

0. はじめに

2000 年国語審議会によって出された答申「現代における敬意表現」では「敬意表現」は「コミュニケーションにおいて、相互尊重の精神に基づき、相手や場面に考慮して使い分けている言葉遣いを意味する。それらは話し手が相手の人格や立場を尊重し、敬語や敬語以外の様々な表現から適切なものを自己表現として選択するものである」と定義されている。

答申では「敬意表現」に関する精神と概要が示され、多くの敬語研究において、待遇コミュニケーション¹の観点から研究が進んでいる。そして、敬意表現は狭義の敬語にとどまらず、談話レベルの大きい枠組みで捉えなければならない点は多くの研究者に指摘されている。

それにも関わらず、日本語教育の現場では「読む」

に対する「お読みになる」、「行く」に対する「いらっしゃる」など語彙中心の指導が多くみられる。本稿では、このような指導方法の背景を考察し、現場でみられる事例から語彙レベルでの指導の問題点について述べる。

1. 「敬意表現」の学習

前述した答申には「敬意表現」についての具体的な形やその詳細についての全てが明らかにされていないわけではない。しかし、敬意表現の学習に重要な

1 蒲谷 (2003) では「待遇コミュニケーション」を「TC」と呼び、以下のように規定している。

「TC」の最も簡潔な規定としては、「TC」とは「待遇表現」「待遇理解」の総称であり、「待遇表現」「待遇理解」を相互交流の観点から捉えようとするものである」ということになる。(中略)したがって、「TC」として扱われる範囲は、例えば「語」のレベルの「敬語」から、相手を貶めるようなコミュニケーション行動まで、非常に幅広いものとなる。

*湘南工科大学 工学部 コンピュータ応用学科 准教授

**湘南工科大学 留学生別科 講師

のは「いつでも使える便利なお手本となるべき言葉を覚えることではなく、一人一人が考え、習熟していく過程において言葉を磨いていく」(坂本 2001)ことであり、このような考えは敬意表現の学習だけでなく外国語を学習する際に重要な点だと思われる。

ひと言で敬意表現と言っても、日本語における敬意表現はいわゆる「敬語」と言われる尊敬語・謙譲語・丁寧語(以下、敬語)だけでなく、談話レベルや非言語行動など多くの要素が敬意表現として扱われる。また、敬意表現の使用については、年齢や社会的地位の上・下や親・疎はもとより、ウチ・ソトの関係、発話がなされる場面、話し手が望む聞き手との距離など様々な物理的・心理的な要因が絡み合い発話表現が選ばれる。よって、日本語学習者にとって敬意表現は難しい項目の一つといえる。

つまり、敬意表現の学習は敬語を覚え、ある一つの要因で設定された場面における会話(例「会社で社員が課長に休みの許可を得る会話」)を練習するだけでなく、敬意表現を大きい枠組みで捉え、より複雑な要因が絡み合った場面において、どう自分を表現していくのかを考え、練習を行うことが重要である。

2. 「敬意表現＝敬語学習」の背景

多くの研究でも指摘され、現場の日本語教師でさえ「敬意表現＝敬語」でないことを認識しているにも関わらず、実際の授業では「敬語の暗記」から脱却できない理由として「教師の意識欠如」と「使用教材の問題」の2点が考えられる。

前述したとおり日本語教育における敬意表現は敬語のみではない。敬意表現の学習は敬語の暗記という語彙・単文レベルの学習ではなく、談話レベルでの学習が必要である。また、「敬語という言語現象が単に文法上・意味上の問題だけでなく、非常に広範でかつ複雑なコミュニケーション上の問題を内蔵するもの」(川口 1987)であるため、初級後半のある課で敬語を独立して扱うのではなく、どのような初級文型項目であっても、文脈化²された練習の中で常に待遇を意識し学習することが重要である。それを教師が意識し、行わないことには学習者の中に「敬意表現＝敬語」という意識がうまれてしまう。敬意表現に対する教師の意識の欠如は「敬意表現＝敬語

の暗記」という授業につながり、「語彙を変換すれば敬意を表す表現になる」との意識を学習者にうえつける可能性があることを教師自身が意識しなければならぬ。

また、敬意表現の使用場面に関して、「先生と学生」「社長と社員」のように上・下関係に焦点をあてた場面を設定することが多く、親・疎はもとより、ウチ・ソトの関係について取り扱われることは少ない。また、発話がなされる場が公的な場面なのか私的な場面なのかについても取り扱われることが少ない。日本語では敬意表現があらわれる場面が非常に複雑で、日本語学習者の母語にはみられない場面やズレが生じる場面もある。教師は学習者の母語との相違点をできる限り意識し、多くの場면을提示する必要がある。

敬意表現が敬語の暗記という授業になりがちなもの一つの原因として、現場で使用されている教材やカリキュラムの問題が考えられる。現在、多くの日本語教育機関で使用されている日本語の初級教科書『みんなの日本語』においては、敬語が初級最後の49課「尊敬語」と50課「謙譲語」で独立して提出されている。丁寧語に関しては独立して扱われていないが、尊敬語と謙譲語が提出される際に提出されることが多い。49課を例に教材の問題点について述べる。

49課では①「～(ら)れます」②「お～になります」③特別な尊敬語④「お～ください」の順に提出され、『みんなの日本語初級Ⅱ教え方の手引き』(p.213-p.214)には留意点として以下が挙げられている。

- 1) ①の敬意は②③に比べて低い。
②③はそれぞれ語形の制約を持つので、補完しあいながら使われる。
①は「～てください」の形がない。②「お～になります」の依頼の形は「お～になってください」(例:「お待ちになってください」となるが、敬意が過剰気味であり、普通は「お～ください」を用いる。)
- 2) 名詞や形容詞について敬意や丁寧さを表す接頭辞「お／ご～」は、原則的に漢語には「ご」、和語には「お」がつくが、学習者にとってはわかりにくく、例外もあるので、この段階では接頭語が付いて提出される語彙をそのまま覚えさせる。

また、導入・練習例として「事務所で上司・同僚と話している場面」「毎日の生活について学習者から先生に質問」「部長と昼ごはんを食べに行く」「飛行

² 文脈化とは、「ある表現が「誰が／誰に向かって／何のために」行われるものかを記述すること」(川口 2003)

機の中で、スチュワーデスが指示をしている」などが挙げられている。

以上のように、従来の敬意表現の学習では導入・練習で設定されている場面に偏りがあり、敬意表現に関する説明や練習が語彙レベルのものとなっている。また、初級最後の課で独立して提出することによって、敬意表現があたかも文法項目の一つであるかのような錯覚を生み、49課だけで敬意表現の学習が完結するかのような印象を受ける。このような教材やカリキュラムによる時間的な制約が「とりあえず敬語はかたちを覚え、徐々に使えるようになればよい」という意識に繋がるのである。

3. 日本語学習者の敬意表現の特徴

次に、現場の事例からみられる日本語学習者の敬意表現の特徴を述べる。ここでは、日本語学習者数が多い中国、日本語と比較的似ている言語と言われている韓国、日本への留学生数が年々増えてきているベトナムの日本語学習者を中心に敬意表現の特徴を中心にみていく。ここでは、言語行動についてのみ扱う。

3.1. 中国人日本語学習者の特徴

私たちが日本で中国語を学習すると、初級の教科書で明らかに敬語とわかる表現は目上の相手に対して **ni** ではなく **nin** を使うというくらいである。また、中国人日本語学習者に中国語の敬意表現について尋ねると、同じ答えが返ってくる。ここからわかるように、中国語では敬意表現を使用する場面が少なく、上・下や親・疎、ウチ・ソトなどの心理的・物理的要件によって発話が異なることもほとんどない。よって、中国人日本語学習者は、学習の早い段階から敬意表現がなされる様々な場面を理解することがまずは重要なことだと言える。

中国人日本語学習者は母語において多様な敬語表現がみられないため、初対面や年長者に対しても、普通体で話をする学習者をみかける。このような傾向は日本語母語話者に誤解を生む恐れがある。様々な表現の中から学習者自身が言葉を選び、自分のことばとして日本語を使用することが望ましいと考えるが、不要な摩擦や誤解を起こさないためにも、まずは丁寧体の定着を図ることが中国人日本語学習者には必要なことだと言える。

3.2. 韓国人日本語学習者の特徴

韓国は儒教の精神が根強く、年齢の上・下に配慮した言語行動が多く見られる。韓国語と日本語は同

系の言語であり、文法体系に似ている点が多く、語彙においても発音が似ている語彙もあることから、韓国語母語話者は比較的容易に日本語を習得すると言われている。また、敬意表現を選択する際の判断基準が多いため、敬意表現がなされる場面の理解は比較的容易に行える。しかし、判断基準に関しては日本語と相違点があるため、注意が必要となる。

韓（2009）では敬意表現を発話する際、話し手の判断の基準になる 10 の要因を挙げ、日本語と韓国語を比較し、特徴と相違点を述べている。要因を 1 つずつ切り離して比較することは現実の場面とは少し異なるが、日本語と韓国語の相違点がわかりやすく明示されている点では非常に興味深い。

多くの韓国人日本語学習者に注意が必要な点は「ウチ・ソト」の要因である。韓は「日本語の場合、第三者である話題の人物について話すとき、その話題の人物が自分側の人物なのか、聞き手側の人物なのかは敬語行動を決める要因になる。（中略）韓国語では話題の人物に対する話し手の敬語行動はその人物に対してどう待遇すべきかの判断があるだけで、話題の人物が自分側の者あるいは相手側であるということは問題にならない。それで、日本語は聞き手中心の相対敬語、韓国語は崇める条件を満たしていれば、話題の人物がどちら側に属しているかにかかわらず崇める絶対敬語と特徴づけられている」と述べている。よって、韓国人日本語学習者からは次のような発話が多く聞かれる。

A：「Bさん、そのかばん素敵だね」
B：「ありがとう。おばあさまにいただいたんだ」

A：「〇〇課長、いらっしゃいますか」
B：「ちょっと席をはずしていらっしゃいます」

韓国語においては、年齢や社会的地位の上・下関係や親・疎関係などの要因が優先し、ウチ・ソトや心理的距離によって敬意表現がなされることは少ない。これは、年代や場面によって異なるが、韓国人日本語学習者にとって最も気をつけなければならない点と言える。

また、敬意表現に対する過剰な反応から「先生、何をめしあがられますか」「もうこの本をお読みになされましたか」のような二重敬語がみられたり、逆に、親しくなっても「何が食べたいですか」「韓国語が上手ですね」のような丁寧体の発話がなされたりする傾向もみられる。日本語では同一の聞き手との同一の談話において、心理的な要因から「丁寧体から普通体」「普通体から丁寧体」「普通体から丁寧体

から普通体」というようにスピーチレベルが様々に変化することもある。しかし、韓国語では心理的距離感によってスピーチレベルが変化することが少ない。よって、敬意表現を選ぶ際、心理的要因が上・下関係などの物理的要因よりも優先される場合がある点も日本語の特長として韓国人学習者に提示する必要がある。

3.3. ベトナム人日本語学習者の特徴

韓国同様、ベトナムにも儒教の精神が根強く、年齢の上・下に配慮した言語行動が多く見られる。その中でも、特筆すべき点は二人称代名詞による敬意表現である。

- 例) ① 「**uống nước không?**」
(水を飲みますか)
② 「**Anh uống nước không?**」
(水を飲みますか)

上記①と②は同じ「水を飲みますか」という意味を表す。しかし、自分より目上の人に対しては必ず二人称代名詞をつけ(太文字)、年下に対してはそれを省くことが可能である。ここで、注意しなければならないのは、自分と相手との年齢や関係などを瞬時に見極め、二人称代名詞もしくは一人称代名詞を選ばなければならないという点である。ベトナム語における二人称代名詞について富田(1996)は次のように述べている。

ベトナム語では、日本語などと異なり、二人称代名詞(呼称詞)は極めて複雑な体系を持っており、相手の性別や年齢、相手と自分との上・下、親・疎、尊・卑の関係に従って、その相手にふさわしい二人称代名詞(呼称詞)が選ばなければならない。(中略)**Chào**や**Cám ơn**の後ろには二人称代名詞を忘れないようにしなければならない。これがないと非常に無作法に聞こえたり、無礼に響いたりするので注意を要する。

上記の点は一人称代名詞にも該当することであり、相手との関係によって一人称代名詞を選ばなければならない。しかし、一人称代名詞に関しては、日本語の「わたし」同様、相手との関係については中立的で、特別な感情を表すことがない **Toi** という一人称代名詞を使用すれば問題がないので、二人称代名詞ほどの注意は必要ないであろう。

以上のように、ベトナム語では的確な二人称代名

詞が敬意を表す際に重要となる影響で、ベトナム人日本語学習者は「あなた」を多用する傾向がある。この点に関しては後述するが、まずは、日本語における「あなた」の使用場面の確認、二人称代名詞を使用するなら「あなた」ではなく、相手の名前や役職を呼ぶことが多い点、日本語では一人称・二人称代名詞は省かれることが多く、省くことによって無礼にはあたらない点などを提示する必要がある。

ベトナム語では敬意表現を選ぶ要因の中で、上・下関係が最も優先され、敬意は代名詞によって表す。また、親・疎関係でも代名詞が変化する点は日本語と同じである。しかし、日本語では、「先生、何を召し上がりますか?」が「お前、何食べる?」のように代名詞だけでなく、動詞によっても敬意表現を表すが、ベトナム語では日本語ほど詳細かつ厳格に動詞の変化があるわけではない。つまり、ベトナム語では敬意を表す際に代名詞が非常に重要となるのである³。

ウチ・ソトの概念はベトナム語にはないので、ベトナム人日本語学習者には早い段階から指導する必要がある。

3.4. 学習者に共通する問題点

3.4.1. 文末の非丁寧

多くの日本語学習者に共通する問題として、語彙のみを敬語に変換し、文末は丁寧な表現ではないという傾向があげられる。例えば、「いらっしゃる」は「行く」または「居る」の尊敬語であるが、学習者から「明日いらっしゃる?」のような発話が聞かれることがある。この場合、「です」「ます」を伴わなければ発話自体は普通体であり、話し手が自分を品よく見せるための美化語とでもいうべき表現であり、尊敬表現とは言えない。尊敬語も謙譲語も丁寧語の「ます」をつけて初めて尊敬表現、謙譲表現として機能するのである。このような傾向からも、動詞の語彙を尊敬語、謙譲語に変換する練習に重点を置くのではなく、談話全体から文へという大きな枠組みで敬意表現を捉え、指導・練習を行わなければならない。

3.4.2. 丁寧の接頭辞

丁寧の接頭辞は、原則的には漢語由来の言葉には「ご」を付け、やまと言葉には「お」をつける。ま

³ 他にも **chào** や **cám ơn** の前に、さらに丁寧語である **xin** (漢語の「請」に由来する語) を付けて **Xin chào** ~., **Xin cám ơn** ~. と言ったり、文末に **a** を付けて、**Chị có khỏe không ạ?** のように言い、敬意を表すこともある。

た、欧米の言語からの借用語には何もつけないことになっている。しかし、この原則に外れる表現がかなりある。例えば、お食事、お通夜、お葬式、お教室、お受験、おトイレ、おビール、おタバコ、などである。「お」を多用する傾向は女性に多くみられ、若い人より年配の人が使う傾向にある。また、子供を対象にした職業についている人の職場や、案内のアナウンスやポスターなど、受け手が不特定の場合も丁寧の接頭辞は多用されている。

しかし、ここでも敬意表現同様、学習者に原則のみを提示し、丁寧の接頭辞の例外や使用場面を提示しないことで、「ご誕生日おめでとうございます」や「医者さん」という発話がなされることがある。男性が「お」を多用すると女性のように少し違和感があるが、男性も「お」をつけたほうが自然な場合がある点や丁寧の接頭辞には例外が多くみられる点など、指導を行う際に留意しなければならない。

3.4.3. 「あなた」の多用

日本語では聞き手に向かって「あなた」を使うのは相手が目下の場合が多い。目上の相手に向かっては「先生」「社長」などのような肩書きを用いるか、「あなた」を抜いた発話を行う。

前述した代表的な初級教科書『みんなの日本語』では「あなた」や「わたし」という代名詞が主語で使用される場合は括弧書きで記され、目的語としての「あなた」「わたし」は練習箇所に記載がある。語彙帳には1課で「あなた」と「わたし」が提出され、口頭練習では「〇〇さんは何歳ですか」「私は23歳です」と代名詞を伴っての練習が行われている。教師側は「あなた」という語彙に関しては注意をはらい、「あなたは何歳ですか」という質問がなされた場合には即座に「名前がわかる場合はあなたではなく名前を呼んでください」というように指導されることが多い。しかし、それでは初対面で名前がわからない場合には「あなた」を使用してもよいという誤解を生む恐れがある。実際、学習者から「あなたは日本人ですか」「あなたは先生ですか」という発話をよく聞くが、これに因るものであろう。

母国語において二人称が尊敬表現に大きく関わる言語であると二人称を省略せずに「あなた」を多用する傾向になるので、注意が必要である。また、「あなた」という二人称代名詞がときに「相手の名前」であったり、「相手の役職」であったりと、発話の場面に応じて変化するにも関わらず、それに関する詳しい説明がなされないと、学習者は母国語訳を鵜呑みにし、母国語での使用範囲を日本語にもあてはめてしまうことになる。

4. 考察

以上、日本語教育の現場における敬意表現学習の背景と現場からの事例から考えられる問題点について述べた。これらを踏まえて、日本語教育における敬意表現の学習についての一案を提示する。

4.1. 大きな枠組みでの学習

学習者に共通する問題点からもわかるように、敬意表現を語彙中心に学習することにより、「語彙は正しいが文や談話全体をみると敬意表現とは言えない」という談話が展開される恐れがある。これは、文型中心に学習することにより、「文型はわかるが、その文型を使って、何かを遂行することができない」という状況と似ている。昨今の日本語教育ではプロフィシェンシーを基軸にした日本語教科書が出版され、注目されているが、文型同様、敬意表現の学習においても「いつ、どのような場面で、どのような目的を達成するために使用されるのか」を学習者に意識させる必要がある。そのためには、単なる語彙の学習やランダムに選ばれた場面の会話集の学習では十分とは言えない。敬語表現にその他の様々な要因を加え、大きな枠組みとして構築された敬意表現として学習する必要がある。

学習者に敬意表現をより自然に大きな枠組みで捉える学習として、川口（2003）で挙げられている「チャンピオンスピーチ」の例がある。「チャンピオンスピーチ」はテストの高得点者がクラスメートの前でスピーチを行う活動である。スピーチではチャンピオンになった感想や勉強方法についてだけでなく、個人的なできごとなど様々なことについてスピーチをする。さらに、司会者を設定する場合もある。スピーチという改まった場面を設定することにより、敬意表現が使用される場面の認識を高め、敬意表現を効果的に導入することができると言える。

実際の教育活動を行う際、実際の場面に近い場면을学習者に提示し、「きもち」が「かたち（言葉）」へとより自然につながる活動を初級レベルから授業に取り入れていく必要がある。そして、敬意表現が使用される場面や物理的・心理的要因を学習者に意識させることによって、より効果的な敬意表現の学習が期待できるのではないだろうか。

4.2. 敬意表現が現れる場面の提示

より効果的な敬意表現の学習を行う際に重要な点は、学習者にとってより身近で、実際の場面に近い場면을提示することである。そして、上・下関係はもとより、親・疎やウチ・ソトの関係もとりあげ、

数多くの場면을提示し、繰り返し練習する必要がある。また、練習はチャンピオンスピーチのように自然なかたちで毎日の教室活動として取り入れられたり、その日の学習項目につなげた活動で敬意表現を意識させたりすることも可能であろう。

どのような場面であっても、語彙や一文で敬意表現が成り立つことは少なく、談話全体で敬意表現をあらわすことを認識させ、敬意表現の学習は早い段階から指導すべきである。また、ウチ・ソトの概念に関しては、学習者の母国語ではみられないことが多いため、よりわかりやすい場面を設定し、繰り返し練習する必要がある。

4.3. 教科書および教材の改善

敬意表現は決して敬語だけを指すのではなく、文末の表現であったり、代名詞の使用であったりと非常に幅広い。他にも、談話を開始する際の「呼びかけ」や談話展開、本稿では扱わなかったが、非言語行動も非常に重要である。これら様々な敬意表現を日本語学習の早い段階から提示し、学習者に意識させることが必要である。そのためには、現行の教科書を改善する必要があるであろう。

「留学生にとって難しいから」という理由で、初級教科書の最後の課で敬語が独立して提出されたり、様々な場面の会話を練習しても、敬意表現の原理原則は留学生自身で気づかせるというような認識の下では敬意表現が「できる」ようにはならない。紙面の関係で教科書には載せられない部分があるにしても、教師の指導方法によって、それは改善できる。教師が意識を変え、教材や指導方法を変えることで、学習者の意識も変化し、敬意表現が「できる」ようになると考える。

5. おわりに

留学生は日本語学校では丁寧体（ときに普通体）で教師と話をし、「ですます体」で作文を書く。大学では丁寧体で話をするが、敬語もある程度使えることが求められ、「である体」で論文を書く。社会に出れば、敬語が使えることは大学以上に求められる。

「敬語は日本人でさえ使えないから」とか「日本語は母語ではないから」という理由で、適切な敬意表現を学習させない、学習しないということはおかしい。話し手が相手の人格や立場を尊重し、自己を表現するための一つとして敬意表現が選択できるよう指導できればと考える。

本稿では、現場でみられる事例から敬意表現の学習の問題点や背景を考察したが、今後、敬意表現の

大きな枠組みの研究を進め、日本語教育に役立てていきたい。

【参考文献】

- 蒲谷宏（2003）「『待遇コミュニケーション教育』の構想」『講座日本語教育』39, pp.1-18, 早稲田大学日本語研究教育センター
- 川口義一（1987）「日本語初級教科書における敬語の扱われかた」『日本語教育』61, pp.126-139, 日本語教育学会
- 川口義一（2003）「『文脈化』による応用日本語研究—文法項目の提出順序再考—」『早稲田日本語研究』11, pp.57-63, 早稲田大学日本語学会
- 川口義一（2003）「初級日本語課程の『教室の文脈』における『待遇コミュニケーション教育』」『早稲田日本語教育学』11, pp.37-51, 早稲田大学日本語学会
- 坂本恵（2002）「『敬意表現』研究の意義と方法」『早稲田日本語研究』10, pp.65-73, 早稲田大学日本語学会
- 富田健次（1996）「ベトナム語の基礎知識」大学書林
- 韓美卿・梅田博之（2009）「韓国語の敬語入門」大修館書店